

## ディベートの方法

国語監修・執筆

中澤匠吾

### ■ 今回のポイント

- ① ディベートのルールと流れ
- ② ディベートにおける表現技術
- ③ ディベートにチャレンジ

#### ① ディベートのルールと流れ

「ディベート」とは話し合いの形式の一つで、あるテーマに対し、肯定（賛成）の立場と否定（反対）の立場に分かれて一定のルールに従い討論をし、審判団がどちらの論が勝っていたかを判定するものです。

#### ② ディベートにおける表現技術

ディベートの発言は、相手に勝る説得力が必要なのはもちろん、審判団を納得させることができるよう、簡潔でわかりやすい表現を心がけましょう。また、初めの立論でしっかりと主張を述べたり、相手の主張への反論はすぐに行ったりするなど、表現、発言についての留意点を理解しましょう。

#### ③ ディベートにチャレンジ

論題を設定して、実際のディベートにチャレンジします。ディベートでは、本来持っている自分の意見とは別の立場であったとしても、相手を説得するための論を構築することも必要です。

### ■ 今回の言語活動

#### ■ ディベートに挑戦する

番組では、「コンビニエンスストアは二四時間営業をやめるべきである」という論題でディベートを行います。

- 肯定側……「二四時間営業を廃止すべき」という論を主張
- 否定側……「二四時間営業すべき」という論を主張

今回のデベートは、大きくまとめると以下のような流れで進めていきます。

- ① 司会者による論題の宣言
- ② 肯定側・否定側それぞれの立論（主張の表明）
- ③ 作戦タイム
- ④ それぞれのグループの反論
- ⑤ 作戦タイム
- ⑥ それぞれのグループの反論
- ⑦ 作戦タイム
- ⑧ それぞれのグループの最終弁論
- ⑨ 審判団による審議、判定

### 【立論】

まず、肯定、否定それぞれの立場で立論を述べます。立論を説得力のある主張とするためには客観的な根拠を留意しなければなりません。論題に関する資料、データを収集し、十分に調査しておく必要があります。

### 【反論】

相手側の立論の内容を受け、疑問点や矛盾点をとらえて反論します。反論に臨むための作戦タイムは三分。短時間で反論を構築しなければならぬので、事前に相手側の立論の根拠を予測しておく、反論もしやすくなります。

### 【最終弁論】

相手側の論を批判し、自分たちの論の正当性を主張します。ここでも相手側からの反論としてどんなことが返ってくるかを予測し、反論に対する反論が即座にできるようにしておくことが大切です。

### 【審判団の評価と判定】

審判団は、あらかじめ設定された項目について評価し、協議のうえ勝敗を決定します。

#### 〈評価の項目〉

- (1) 調査と分析は十分であったか。
- (2) 根拠のある主張だったか。
- (3) 議論の構成と配列は適切だったか。
- (4) 聞き取りやすい話し方をしていったか。
- (5) 反則行為はなかったか。

審判団が、評価をする際に大切なのは、「主観で判断しないこと」です。つまり、自分の個人的意見がどうであるのかに左右されることなく客観的視点を持ち、より説得力のある主張が論理的に述べられているかどうかを重視し評価するということが必要です。

■ 今回のまとめ

番組では、実際の論戦（ディベート・マッチ）に主眼を置いた演習を行っており、ディベートの実際について模擬的に体験することができます。双方の議論を組み合わせ、ルールに基づいて主張を展開することについて学べますが、あわせてディベートに臨む前段階にも留意しましょう。つまり、「事前にどれだけ準備ができているか」ということです。このことが、ディベートの成否を決めるといっても過言ではありません。

ディベートの学習には、「論題について調べる」「情報を整理する」「話を注意深く聞く」「説得力を持った論を構成する」「筋道立てて話す（主張する）」といった、国語にまつわる学びがたくさん詰まっています。実践により、論理的思考力を磨いていきましょう。

